

氏名	嶋野 重行
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	院博甲第15号
学位授与年月日	平成27年3月23日
学位授与条件	学位規程第5条1項該当
学位論文題目	小学校・幼稚園教師の指導態度の研究 —受容的指導態度と要求的指導態度—
論文審査委員	主査 田村 節子 東京成徳大学大学院 教授 副査 新井 邦二郎 東京成徳大学大学院 教授 副査 中村 真理 東京成徳大学大学院 教授 副査 井上 忠典 東京成徳大学大学院 教授

1. 論文概要：

(1) 目的

本研究の目的は、幼稚園と小学校の教師の指導態度と子どもとの関係を検討し、相互の教育的な影響について検討することにある。そのため教師の受容的（A）態度と要求的（D）態度の観点から学校教育の場における子どもへの心理的な影響について検討した。

(2) 研究方法

研究の主な方法は、無記名自記式質問紙による調査法である。調査対象の主なものは小学校教師と幼稚園教師そして児童たちである。

(3) 研究内容

1) 教師の指導態度についての文献的研究（研究1）

教師の受容的（A）態度と要求的（D）態度についての研究を俯瞰し、教師の指導態度の概念とその教育的機能について考察した。

2) 小学校教師のAD指導態度尺度の作成（研究2）

A尺度項目10項目、D尺度項目10項目、計20項目から構成される小学校教師のAD指導態度尺度を作成した。

3) 小学校教師のAD指導態度と教育的機能との関連（研究3）

①小学校教師のAD指導態度と児童との心理的距離の関係

小学校教師の受容的（A）指導態度と要求的（D）指導態度と子どもとの心理的距離について検討した。児童が認知する教師の受容態度の度合いによって心理的距離の左右されることが認められた。

②小学校教師のAD指導態度と「問題行動」認知との関係

小学校教師が認知する児童の「問題行動」について明らかにし、それが、教師の指導態度によって、問題性を強く認知しているか、低く認知しているかについて検討した。受容的（A）指導態度と指導的（D）指導態度の間に問題性に対する評価に差がみられた。

③小学校教師のAD指導態度と学校ストレス、学校不適応感との関係

教師に対し受容的(A)態度と認知している児童と要求的(D)態度と認知している児童の学校ストレスと学校不適応感について検討した。その結果、教師の受容的(A)態度は児童のストレスや不適応感を軽減する機能があることがわかった。

④小学校教師のAD指導態度とself-esteemとの関係

教師のAD指導態度と児童のself-esteemの関係について検討した。その結果、児童にとって重要な他者である教師から受容され、尊重されることは、肯定的な自己像を形成する上で大切と考えられた。

4) 幼稚園教師のAD指導態度尺度の作成(研究4)

幼稚園教師の幼児に対する受容的(A)態度および要求的(D)態度を測定するためのAD尺度(自記式)を作成した。

①教育実習生の調査による項目の選定

短期大学生が幼稚園の教育実習での観察を通して、「気になる子ども」への学級担任の支援行動から教師の受容的(A)態度と要求的(D)態度の候補となる項目を選定した。

②幼稚園教師の調査によるAD指導態度尺度の作成

教育実習生の調査によってAD尺度の候補項目として選定された項目をもとに、幼稚園教師のAD指導態度尺度(自記式)を作成した。

5) 幼稚園教師のAD指導態度と「気になる子ども」の認知との関係(研究5)

①幼稚園における「気になる子ども」の認知:「気になる子どもチェックリスト」の作成…幼稚園において教師から「気になる子ども」と認知される子どもの存在を明らかにする「気になる子どもチェックリスト」を作成した。

②幼稚園教師のAD指導態度と「気になる子ども」の認知との関係

幼稚園において教師から「気になる子ども」と認知される子どもの行動、すなわちア)トラブル行動(反社会的行動)、イ)非社会的行動、ウ)自閉的行動、エ)多動的行動、オ)気になる子どもの行動特徴と教師のAD指導態度の関連について検討した。その結果、非社会的行動と自閉的行動を示す子どもに対しては、教師が受容的(A)態度でかかわること。また、自閉的な傾向のある「気になる子ども」の認知に対して、教師は受容的(A)態度、要求的(D)態度を意識した丁寧なかかわり方をする関係にあることが分かった。

(4) 全体的考察

本研究において、小学校教師、幼稚園教師の指導態度として受容的(A)態度と要求的(D)態度があり、それは子どもの育つ心理に影響を与えていることが明らかになった。そして、このことは学校教育において、教師自身が自分の態度を自覚的にとらえて子どもとかかわっていくことの必要性を改めて示していると考えられた。

2. 評 価：

本研究は、小学校教師ならびに幼稚園教師を対象にして、受容的指導態度と要求的指導態度について質問紙を用いて実証的に検証したものである。このテーマの研究を開始したのが1988年であり、その後約26年にわたり研究を重ねているために、長い年月をかけて取り組んできた著者の研究の足跡が色濃く滲み出ている労作である。その間に、このテーマに関する学会での著者の研究発表はおよそ40編を数えるほどになっている。

小学校教師を対象に調査では、受容的指導態度と要求的指導態度と、児童との心理的距離、「問題行動」認知の仕方、子どもたちの学校ストレスや学校不適応感、self-esteemとの関係を見出していることは高く評価できる。また、幼稚園教師を対象とした調査では、受容的指導態度と要求的指導態度と、トラブル行動（反社会的行動）、非社会的行動、自閉的行動、多動的行動などの気になる子どもの行動特徴との関係を見出したことが高く評価できる。

ただ、小学校教師の受容的指導態度と要求的指導態度の尺度の出来栄えの良さと比較して幼稚園教師の尺度の出来が劣ることは否めない。幼稚園教師の受容的指導態度と要求的指導態度の尺度づくりの再挑戦を望みたい。

3. 最終試験結果：

平成27年2月14日、公開において、論文提出者より報告を受け、質疑応答が行われた。その結果、最終試験に合格と判断された。

4. 結 論：

論文審査と最終試験結果の評価に基づいて、本論文は博士の学位に値すると判断された。

平成27年2月14日